

相模原の障害者殺傷事件

特別寄稿
作家 辺見 庸氏

相模原の障害者施設殺傷事件で、作家の辺見庸氏が事件についての思いをつづった原稿を寄せた。



わたしは体に大きな穴を暗々とかえて生きています。その空しさにすすり泣いてはいる。しかし突とめようとはしない。穴の、底の深さを。かがみこんで覗きでもたら、だいち、なにがあるかわったものではない。だから、穴なないふりをする。空しさは空しさのままに。穴は穴のままに、ほつっおへ。いくつもの穴を開けたままつ。うたつ。さかんにしゃべる。

誰が誰をなぜ殺したか

穴ではなく、愛について。ひきつたように笑い、愛をうたい、空しくしゃべる。黒い穴の底に、愛がこらがり落ちてゆく。

相模原の障がい者殺傷事件の容疑者はとっくにつかまっている。だが、誰が、誰を、なぜ殺したのか。こんな肝心なことが正直よくわからない。のどもとにせりあがってきているものもある。それを言葉にしようとする。言葉がボロボロとつぶれる。白状すると、わたしは夜中に思わず嗚咽してしまつた。闇にただよつ痛ましい血のおいむせたのではない。人間にとってこれほどの重大事なのに、その「だ」を語ろうとしても、どうしてもうまく語りえないだけだ。わたしの内奥の穴が、仮説という仮説をのみこんでしまつた。それで泣けてきた。

惨劇からほの見えてくるのは、人には①「生きるに値する存在」②「生きるに値しない存在」の2種類があると容疑者の青年が大胆に分類したらしいことだ。この二分法はたい

を「狂気」と断じるむきがあるけれども、だとしたら、人類は「狂気」の道から有史以来いとも脱したことがないことになりかねない。生きるに値する命が否かかという存在論的設問は、じつのところ古典的なものであり、論議と煩悶は、哲学でも文学でも宗教でもくりかえされ、ありとある戦争の隠れたテーマでもあったのだ。

たぶん、勘違いだったのだろう。自他の命が生きていくに値するかどうか、という論議と苦悩には、これまでもおびただしい代償を支払い、とうに決着がついた、もう卒業したと思つていたのは、それは決着せず、われわれはまだ卒業もしていないからである。あらゆる命が生きていくに値する。この理念は自明ではなかった。深い穴があつたのだ。考えてもみてほしい。あらゆる命が生きていくに値すると無意識に思つてきた人びとでも、おおかたはあの青年へのきたるべき死刑判決・執行はやむをえないと首肯するのではなからうか。つまり「生きるに値する存在」と「生きるに値しない存在」の識別と選別を、間接的に受けいれ、究極的には

あの青年はいま、なにを考えているだろうか。悪夢からさめて、ふるえているだろうか。かれにはヒトゴロンをしたという実感的記憶があるだろうか。「除草」のような仕事を終えたとも思っているだろうか。生きる術さえない徹底的な弱者こそが、かえって、もっとも「生きるに値する存在」であるかもしれない。そんな思念の光が、穴に落ちたかれの脳裡に「閃く」とはならないのだろうか。

目をそむけずに凝視するならば、怒るより先に、のどの奥で地虫のように低く泣くしかない悲しい風景が、世界にはあふれている。「日本で生活保護をもらわなければ、今日にも明日にも死んでしまうという在日がいるならば、遠慮なく死になさい」。先だつての都知事選の街頭演説で、外国人排斥をうったえる候補者が、なにはばからず声をはりあげ、聴衆から拍手がわいたという。かれは11万4千票以上を得票している。わたしの予想の倍以上だ。これと相模原の殺傷事件の背景を直線的にむすびつけるのは早計にすぎると

後者の「抹殺」をみんな黙過することになりはしないか。だとしたら、わたしは感づ。だとすれば、死刑という生体の「抹殺」をなんとなく黙過する人びとと、「抹殺」をひとりで行つたかれとの距離は、じつのところ、たがいの存在が見えないほどに遠いわけではないのではないか。少なくとも、われわれは地つぎの曠野にいま、たがいに見当識をなくして、ほつ々とたずんでいると言えはしないか。

ナチズムは負けた。ニッポン軍国主義は滅びた。優勝劣敗の思想は消えつた。天賦人權説はあまねく地球にひろがっている。だろっか？ ひょっとしたらナチズムやニッポン軍国主義の「根」が、往時とすっかりよそおいをかえて、いま息を吹きかえしてはいないか。7月26日の朝まだきに流された赤い血は、けつして昔日の残照でも幻視でもない。「億総活躍社会」の一角からふきだた現在の血である。それは近未来の、さらに大量の血を徴してはいない

凶行のあったその日も、その後も、世界はポケモンGOの狂騒がつづきテレビは真夏のホラー(映画)強化月間」に、リオ五輪中継。リアルとリアルのつなぎ目がはつきりしない。そう言えは、善意と悪意の境界もずいぶんあいまいになってきた。障がい者19人を手ずから殺めた青年に、犯行の発条となる持続的な悪意や憎悪があつたか、いぶかしい。戦慄すべきは、殺傷者の数であるよりも、これが「善行」や「正義」や「使命」としてなされた可能性で

ある。惨劇の原因を、たんに「狂気」に求めるのは、一見わかりやすい分だけ、安直にすぎるだろう。「誰が誰をなぜ殺したのか」の冷静な探問こそがなされなければならない。世界中であいつブプロもまた「誰が誰をなぜ殺したのか」が、じっさいには不分明な、俯瞰するならば、人倫の錯乱した状況下でおきていく瘧れんである。そうした症状はなにも貧者のテロのみの異常ではない。

米軍特殊部隊は2011年、パキスタンでアルカイダ指導者ウサマ・ビンラディンを暗殺したが、その前段で、中央情報局(CIA)のスパイがポリオ・ワクチンの予防接種をよそおつてビンラディン家族のDNAを採取していたことはよく知られている。ワクチン接種がポリオ絶滅のためではなく、暗殺のために利用されたのだ。結果、パキスタンでポリオの予防接種にあたる善意の医療従事者への不信任がつのり、反米ゲリラの標的となつて殺される事件がことしもつづいている。ポリオ絶滅は遅れている。それでも米政府はビンラディン殺害を誇る。「米国の正義」を守つたとして。

正義と善意と憎悪と「異物」浄化の欲動が、民主的で平和的な意匠をこらし、世界中で錯綜し瘧れんしている。7月26日のできごとはそのただなかでおきた、別種のテロである。わたしは思う。あの青年は「姿なき賛同者」たちを背中に感じつつ、目をかがやかせて返り血を浴びたのかも知れない。かれが純粋な「単独犯」であつたかどうかは、究極的にかつていでははしない。石原慎太郎元東京都知事は、前世紀末に障がい者施設を訪れたときに、「ああいう人ってのは人格があるのかね」と言つてのけた。新しい出生前診断で「異常」が見つかった婦人の90%以上が中絶を選択している。なにを物語るのか。

宮共 歴で 近刊
44年まで北京、上海、近刊
96年まで北京、上海、近刊
特派員など、近刊
「自動起床装置」人首、近刊
川賞、「もの食う」生首、近刊
賞、詩集「生首」近刊
賞、詩集「生首」近刊
賞、詩集「生首」近刊
賞、詩集「生首」近刊
賞、詩集「生首」近刊
賞、詩集「生首」近刊

「生きるに値する存在」と「生きるに値しない存在」の二分法は人間観は、いまだ克服されたことのない、今日も反復されている原罪である。他から求められることの稀な存在を愛することは、厭うよりもむずかしい。だからこそ、その愛は尊い。青年はそれを理解する前に、殺してしまつた。かれはわれらの影ではないか。

Read
読み解く